

## 花と侏儒とを語れども

「旱害地帯」（「文語詩稿 一百篇」）を読む

信時 哲郎

「文語詩稿 一百篇」所収の「旱害地帯」には定稿が現存しない。さらに下書稿も現存せず、『新校本全集』には先行作品や関連作品も示されていない。先行研究もほとんどなく、内容に関する議論はほとんど進んでいない。しかし「旱害地帯」は、旱害、つまりヒデリの害の甚だしかった大正末年から昭和初期の状況を詠みこんだ作品として、極めて重要なものだと思う。また、本作が賢治自身の体験を元にした作品であったとすれば、賢治は農業技術者として旱害について認識を改める必要を感じただけでなく、童話作家としても認識を改める必要を感じたのではないだろうか。

まずは『新校本全集』に従って定稿を読んでみたい。

多くは業にしたがひて 指うちやぶれ眉くらき

学びの児らの群なりき

花と侏儒とを語れども 刻めるごとく眉くらき

稔らぬ土の児らなりき

……村に<sup>あがた</sup>県にかの児らの 二百とすれば四万人  
四百とすれば九万人……

ふりさけ見ればそのあたり 藍暮れそむる松むらと  
かじろき雪のけむりのみ

一連目では旱害の起った地方における子どもたちの状況を描いている。入沢康夫（「文語詩難読語句（4）」「賢治研究 111」平成二十二年九月）は「業」を「ぎょう」と読ませているが、確かに「ごう」では仏教用語の「業」、すなわち「業」とは梵語でカルマといふて、すべて過去になしたることのまだ報となつてあらはれぬを業といふ」（童話「二十六夜」）を意味しているように読めてしまうが、ここでは学童たちも農業などの仕事をしなくてはならないということから「ぎょう」と読んだ方がよいように思う。

二連目の「侏儒」は小人のことだ。かつて『宮澤賢治新語彙辞典』には「栄養が悪く成長の遅れた、こびとのような「稔らぬ土の児ら」のことであろう」とあったが、『定本宮澤賢治語彙辞典』では「心の余裕ももてない村の子どもたちにも、花とこびとさんのメルヘンのような楽しいはずのおはなしを話して聞かせても、ということであろう」に改められており、改定は当然であったと思う。花や小人の話などで、旱害地帯の子供たちは心を動かすこともなかったのだということだろう。

三連目はダッシュで囲まれているが、視点人物の内言で、「このような児童が、村に二百人いるとすれば全県では四万人、村に四百人いるとすれば全県では九万人になるだろうか」

ということだろう。二百人で四万人ならば、四百人なら八万人のようにも思えるが、賢治の持っていた「(岩手県市町村分布図)」(昭和四年四月〜昭和七年四月?)には、岩手県の市町村数が二三七あったことから、二〇〇×二三七〇四万七千四百人、四〇〇×二三七〇九万四千八百人となり、千以下を切り捨てればそれぞれ四万と九万となる。『宮澤賢治イハトヴ学事典』の「岩手県」の項で吉見正信は「賢治の時代、19郡1市(盛岡市・明治22年4月市制施行)を中心に、21町<sup>219</sup>にわたる自然と社会空間」と書いていて市町村数に差があるが、それぞれに二百と四百をかけても千以下を切り捨ててしまえば四万と九万で数値に差はない。そもそも同時代の賢治であっても、繰り返される合併のニュースをこまめにチェックし、全県の市町村数がどう変化したかについて把握していたとは考えにくい。

第四連は、視線を遠くに向けると、松の向こうには雪をかぶった山も見えるといった風景である。早害の真つ最中の夏ではなく、敢えて冬(あるいは晩秋か初春?)に設定しているところから、早害が一時だけの問題ではなく、視点人物の心に、早害地帯の問題が長くどどまり続けていたことを示すつもりだったのではないかと思う。

花巻近郊の「早害地帯」が早害の被害から解放されるのは昭和三十六年に豊沢ダムができてからだというので、視点人物は、第四連の段階でも、まだ早害を克服できたという地点には立っていない。事実、『定本語彙辞典』によれば、昭和三年の欄に「早魃四〇日以上に及び、陸稻、野菜類ほとんど

全滅」とあり、また、昭和六年十一月三日に書かれたと思しき「雨ニモマケズ」にも「ヒドリ」とあることにも、それは明らかだ(原文には「ヒドリ」となっているが、それが「ヒドリ」の誤記であったことについて、ここでは繰り返さない)。ところで、平澤信一(「定稿紛失作品「早害地帯」の本文校訂に関わる一試論」(『宮沢賢治《遷移》の詩学』蒼丘書林 平成二十年六月)は、本作の定稿が存在しないために、『新校本全集』でも『十字屋版全集』を参照した本文を採用していることについて、定稿は別の形体であった可能性があるのではないかと論じている。

平澤は、賢治の没後「詩人時代」(昭和十年三月)に本作が掲載された際の形体が、定稿本文をかなり忠実に再現しているのではないかとし、さらに島根県大社町で発行された詩誌「森1」(昭和九年十二月)に、岡崎泰固<sup>たいこ</sup>が発表した「宮沢賢治論」中に「早害地帯」が引用されている例から、定稿本文は次のような四行書きのものだったのではないかと提案している。

多くは業にしたがひて、 指うちやぶれ眉くらき、 学び  
の児らの群なりき。

花と侏儒とを語れども、 刻めるごとく眉くらき、 稔ら  
ぬ土の児らなりき。



早魃はその翌大正十四年にも起こり、賢治は口語詩「毘沙門天の宝庫」で「大正十三年や十四年の／はげしい早魃」と書いている。さらに大正十五年も『定本語彙辞典』によれば、「六月／＼七月 旱害。七月一七日まで雨量少なく植えつけに困難」とあり、賢治も昭和二年九月の日付けのある「詩ノ一ト」の「一〇九二 藤根禁酒会へ贈る 一九二七、九、一六、」に、「この三年にわたる烈しい旱害で／われわれのつゝみはみんな水が涸れ／どてやくろにはみんな巨きな裂罅がはいった」と書いている。

散文「〔或る農学生の日誌〕」は、賢治の農学校時代の見聞が折り込まれた作品だが、「一千九百二十六年六月十四日」に次のように書いている。

水が来なくなつて下田の代掻ができなくなつてから今日で恰度十二日雨が降らない。いったいそれがどう変わったのだらう。あんな早魃の二年続いた記録が無いと測候所が云つたのにこれで三年続くわけでないか。大堰の水もまるで四寸ぐらゐしかない。夕方になつてやつといままでの分へ一わたり水がかかった。三時ごろ水がさつぱり来なくなつたからどうしたのかと思つて大堰の下の岐れまで行つてみたら権十がこつちをとめてじぶんの方へ向けてゐた。ぼくはまるで権十が甘藍の夜盗虫みたいな気がした。

大正十三年から十五年にかけての三年連続の旱害は農民の

間で水引きをめぐるトラブルも起こしたが、賢治はそれもしつかりと描いている。

鈴木守のブログ「みちのくの山野草」(<http://blog.goo.ne.jp/suzukishuhoku/>、二〇〇九年十二月二十二日)に紹介されている「岩手日報」の記事(昭和二年一月二十六日)には、「旧年末を前に本県下の農村は破産の状態／借金の苦しさ／土蔵を売払ひ家を閉ぢて逃げ隠る」とされ、次のようにある。

二三年この方づいた未曾有のカン魃とお米が捨て売り同様の安値のため農村では旧年末を前に悲境のドンぞこに落ちてゐる。これがため家財を売り、遠く出稼ぎに赴いた者も数少ない模様で稗貫郡某村の如きは中産以上の農家でさへ年末の支払ひに二進も三進も行かず、祖先伝来の土地を売り払つたとの哀話もあり、毎日借金取りに攻められるので、致方なく家を閉ぢて水車小屋に一家が引き移つてゐるといふ話もある。況して旱害の程度も一層深酷であつた紫波地方の難民は日々の生活にさへ困窮してゐる者が多くその惨状は全く事実以上であらうとのことだ。かくて本県下の農村はいまや経済上破産状態にあるがやがて本県にもいむべき農村問題社会問題がもちあがるのでないかと識者間に可なり憂慮されてゐる

また、同ブログ(二〇一〇年三月二日)には、やはり「岩手日報」の大正十五年十二月七日の記事が掲載されており、「村の子供達にやつて下さい／紫波の旱害罹災地へ人情味豊

かな贈物」という見出しで、「仙台市東三番丁中村産婆学校生徒佐久間ハツ(十九)さんから紫波郡赤石村長下河原菊治氏宛」に、「日照りのため村の子どもさんたちが大へんおこまりなさうですがこれは私の苦学してゐる内僅かの金で買ったものですどうぞ可愛想なお子さんたちにかけてやつて下さい」という手紙とともに「一貫五百目もある新しい食パン」が贈られたことなどが報道されたようである。

「ヒデリに飢饉<sup>ケガチ</sup>なし」というのは、たしかによく知られた言葉だったようだが、大正末に岩手を襲ったヒデリは相当のもので、他の多くの人々と同じように、いささかヒデリを甘く見ていた賢治にも、大きなショックを与え、それがこの作品を生んだのではないかと思われる。

しかし、気になるのは「花と侏儒とを語れども」である。『定本語彙辞典』にあるように、たしかに「花とこびとさんのメルヘンのような楽しいはずのおはなし」なのではあろうが、ここには、その話者で作者だったのが賢治自身であった可能性についての言及がない。賢治が「花」に関する童話を多く書いたのは「花鳥童話集」という構想を立てていたことなどからも納得できるが、「小人」については、少し注意が必要だと思う。というのも、単に子供向けの楽しいメルヘンを代表するものとして登場しているだけでなく、賢治の童話観、異界観、宗教観をも象徴するものとして登場している可能性があるからだ。

例えば、賢治が大正八・九年頃に書いた散文「うるこ雲」などを読むと、ただ子供向けのお話というだけでこの語を使

っているわけではないように感じられる。

「うるこ雲」はこんな話である。話者が北上川に沿って歩いてみると、「小さな甲虫がまっすぐに飛んで来て私の額に突き当たりヒョロ／＼危うく墮ちやうとして途方もない方へ飛び戻る」。すると、「原のむかふに小さな男が立ってゐる。銀の小人が立ってゐる。よこめでこつちを見ながら立ってゐる。にやにやわらつてゐる。にやにや笑つてうたつてゐる」。そして、次のような歌をうたい始める。

なんばん鉄のかぶとむし

月のあかりも つめくさの

ともすあかりも 眼に入らず

草のほひをとび截つて

ひとのひたひに突きあたり

あわてゝよろよろ

落ちるをやつとふみとまり

いそいでかぢを立てなほし

月のあかりも つめくさの

ともすあかりも 眼に入らず

途方もない方に 飛んで行く。

うたい終わると、小人は「よこめでこつちを見ながら腕を組んだまゝ消えて行く」。この小人の歌は、『新校本全集 12 校異篇』も指摘するように、「『ポランの広場』」や「ポラーノの広場」に踏襲されている。

榊昌子（「うろこ雲」 『宮沢賢治「初期短編綴」の世界』  
無明舎出版 平成十二年六月）は、この素材が幅広く使われて  
いることを指摘し、例えば「〔ポランの広場〕」では、「一  
びきのかぶとむしがぶうんとやつて来てぢいさんのひたいに  
ぶつつかった」とあるあとで「うろこ雲」に登場する歌と似  
た歌が登場し、さらに、この歌を歌ったのは風の精だとされ  
る伝説上の存在である又三郎なのだという。

佐藤栄二（「賢治の愛した小人」 『賢治研究103』平成二十  
年二月）は、榊の論考を受けて、小人を「>ファンタジーの  
種子<のシンボル」とし、「春と修羅 第二集」所収の「九九  
〔鉄道線路と国道が〕 一九二四、五、一六、」に「楮髪の小  
さな *soblin*」が登場すること、また、『春と修羅（第一集）』  
の「樺太鉄道」には「コロポックル」が登場し、童話「ざし  
き童子のはなし」があり、また童話「水仙月の四日」に登  
場する雪童子も小人の仲間であろうと指摘している。

佐藤も引用しているが、賢治は森荘巳池（「賢治が話した  
「鬼神」のこと」 『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年  
十月）にこんな話をしたという。

——トラックが川井か門馬まで来た時ですがね、小さい真  
赤な肌のいろをした鬼の子のような小人のような奴らが、  
わいわい口々に何か云いながら、さかんにトラックを谷間  
に落とそうとしているんですよ。運転手も助手も、それに  
全く気がつかないと見えて知らないんですね。私はぞっと  
しましたよ。トラックが谷間に落ちるに違いないと思った

んですね。そしたら驚きましたね。え、大きな、そうで  
ね、二間もあるような白い大きな手が谷間の空に出て、ト  
ラックが走る通りついて来てくれるんですよ、いくら小鬼  
どもが騒いで、落とそうとしても、トラックは落ちないで、  
どんだんあぶない閉伊街道を進むんですね、私はこれはた  
しかに観音さまの有難い手だと思い、ぼおつとして、眠っ  
ているのか、起きているのか、夢なのか、うつつなのかも  
さっぱり解らないんですね、そして宙に浮いてさかんに動  
き廻り、トラックを押ししたり、ひっぱったりする小鬼ども  
と大きな白い手を見比べていましたね。しばらくそうして  
ガタガタゆすられていると、突然異様な声がして、ハッと  
思ったとたん白い手は見えなくなりました。私はもう夢  
中でトラックから飛降り、その瞬間トラックは谷間をごろ  
ごろと物凄い勢いで顛落してしまっただけです。

小人と言え、たしかにグリム童話の「白雪姫」やアンデ  
ルセンの「親指姫」あたりが思い出され、いわゆる童話やメ  
ルヘンらしいものがイメージされよう。しかし、賢治の場合  
の小人は、ただそういった童話らしいイメージを流用してい  
るだけではなく、夢か幻覚の中で出会ってきたような存在た  
ち、あるいはこう言ってよければ、異空間で出会った存在た  
ちだと言ってもよいと思われる。「旱害地帯」における「侏  
儒」については、榊も佐藤も言及していないが、侏儒を語る  
とは、まさにファンタジーを語るということ、それも異空間  
に実在する者たちの物語を聞かせるといった、きわめて賢治

的な意味での童話のことを指していたように思えるのである。  
佐藤のあげた「九九「鉄道線路と国道が」とは、次のよ  
うな作品だ。

鉄道線路と国道が、  
こゝらあたりは並行で、  
並木の松は、  
そろってみちに影を置き  
電信ばしらはもう堀りおこした田のなかに  
でこぼこ影をなげますと  
いたゞきに花をならべて植えつけた  
ちいさな萱ぶきのうまやでは  
馬がもりもりかいばを噛み  
頬の赤いはだしの子どもは  
その入口に稲草の縄を三本つけて  
引っぱったりうたったりして遊んでゐます  
柳は萌えて青ぞらに立ち  
田を犁く馬はあちこちせわしく行きかへり  
山は草火のけむりといっしょに  
青く南へ流れるやう  
雲はしづかにひかって砕け  
水はころころ鳴ってゐます  
さっきのかゞやかな松の梢の間には  
一本の高い火の見はしがあつて  
その片っ方の端が折れたので

赭髪の小さな goblin が  
そこに座ってやすんでゐます  
やすんでこゝらをながめてゐます  
ずうつと遠くの崩れる風のあたりでは  
草の実を啄むやさしい鳥が  
かすかにごろごろ鳴いてゐます  
このとき銀いろのけむりを吐き  
こゝらの空気を楔のやうに割きながら  
急行列車が出て来ます  
ずゐぶん早く走るのですが  
車がみんなまはつてゐるのは見えますので  
さっきの頬の赤いはだしの子どもは  
稲草の縄をうしろでもつて  
汽車の足だけ見て居ます  
その行きすぎた黒い汽車を  
この国にむかしから棲んでゐる  
三本鋏をかついだ巨きな人が  
にがにが笑つてじつとながめ  
それからびっこをひきながら  
線路をこつちへよこぎつて  
いきなりぼっかりなくなりますと  
あとはまた水がころころ鳴つて  
馬がもりもり噛むのです

ここではゴブリン（ヨーロッパの民話などに登場する小鬼）

だけでなく、巨人まで登場する。小人と巨人では正対だが、「巨きな人が／にがにが笑ってじつとながめ」、「いきなりぼっかりなくなります」といった言葉は、先にあげた「うろこ雲」の中で、小人が「にやにやわらってゐる。にやにや笑ってうたつてゐる」とされた後に、「よこめでこつちを見ながら腕を組んだまゝ消えて行く」と書かれていたのとほとんど同じであることから、どちらも「>ファンタジーの種子<のシンボル」として登場しているのだとていいだろう。

賢治は巨人についても多くの幻想的な言葉を綴っており、例えば「春と修羅 第二集」の「一九五 塚と風 一九二四、九、一〇、」には「髪を逆立てた印度の力士ふうのもの」が現れている。また「文語詩稿 五十篇」の「民間葉」には、夢の中に「古き巨人」が現れて、ネプウメリなる薬草の使い方について教えてくれたりする。このほかにも鬼や鬼神の用例をあげていけばきりが無い。いずれにせよ問題なのは、異空間の存在たちが大きいか小さいかではなく、異世界の存在が現実世界に生きる賢治と出会ってしまうという事態の方であるう。

さて、この「九九 「鉄道線路と国道が」」には、口語詩の最終形態が書かれた詩稿用紙の欄外に「童話の扉に」というメモがあり、中地文（宮沢賢治もう一つの童話集序文）（「批評へ2」児童文学評論研究会 平成四年二月）が指摘するように、これは「『注文の多い料理店』以外でありながらそれと同じ傾向・特色を持つ童話集のために用意された」「もう一つの童話集序文」であったと考えられる。

こうしてみれば、文語詩「旱害地帯」に登場する「侏儒」という語も、「>ファンタジーの種子<のシンボル」として現われているとすべきで、文語詩の視点人物が賢治であったとすれば、自分が「旱害地帯」とされる地域で子どもたちに向つて、心象にスケッチされるがままの、時に美しくも怪しい自分らしい童話を語り聞かせたという経験について書いているように考えられる。

もちろん文語詩には虚構化が施されており、たとえ賢治自身が体験したことであっても、推敲が進むにしたがつて第三者化・虚構化されていく傾向があるのはよく指摘されているとおりで、安易に視点人物＝賢治だと思ひ込むことについては十分に注意する必要がある。しかし「一百篇」の「われのみみにたゞしきと」には「ちちのいかりをあざわらひ、／ははのなげきをさげすみて、 さこそは得つるやまひゆる」とあり、同じく「一百篇」の「（翁面 おもてとなして世経るなど）」にも「われは三十ぢをなかばにて」とあり、宮沢賢治その人の人生をあてはめないでは解釈が難しいものも少なくない。

あるいは旱害地帯で読み聞かせを行った人物を、賢治に特定しなくてもよいという読み方も可能だ。しかし旱害地帯の子ども達を前にした人物が取る行動としては、先の「岩手日報」の記事にあったように、「一貫五百目もある新しい食パン」を贈るといふあたりがごく常識的な行為であつて、こうした場面でわざわざ童話を語ろうという人物となると、そうした自信を持った童話作家か朗読家に限られよう。だとすれ



ば、ここに宮沢賢治その人をあてはめないにしても、限りなく賢治に近い存在が視点人物となっていたということになりそうだ。となれば、文語詩から賢治の人生を照らし出して考えてみることも、牽強付会ということでもないように思う。

さて、賢治は、何かの折に早害地帯の子供たちに向って童話を語る機会があったようだ。しかし、この「稔らぬ土の児ら」は、「刻めるごとく眉くらき」ままであったというのだ。

なぜ賢治の童話は受け入れてもらえなかったのだろうか。

賢治は大正十三年十二月刊の『注文の多い料理店』の「序文」で、次のように書いていた（序文の日付は大正十二年十二月二十日）。

わたしたちは、氷砂糖こほりざとうをほしいくらゐもたないでも、きれいにすきとほつた風かぜをたべ、桃ももいろのうつくしい朝あさの日光にっこうをのむことができます。

またわたくしは、はたけや森もりの中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗らしやや、寶石ほうせきいりのきものに、かはつてゐるのをたびたび見みました。

わたくしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

現実世界の食べ物食べ物が十分ではない「岩手」でも、心のスイッチスイッチを入れ替えさえすれば、理想郷としての「イーハトヴ」にたどり着くことが可能で、そこでは「きれいなたべものやきもの」を獲得することができるといのである。

賢治は『注文の多い料理店』の「広告ちらし」において、自分の書いた物語は「純真な心意の所有者たち」にむかつて書かれており、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である。卑怯な成人たちに畢竟不可解な丈である」。つまり「純真な心意の所有者」である子どもならば、必ず理解してくれるという自信があったようだ。

ところで、賢治が童話集の刊行を近森善一に頼みに行った際、こんなやりとりがあったという（鈴木健司「童話集『注文の多い料理店』発刊をめぐる」 発行者・近森善一の談をもとに）『宮沢賢治という現象 読みと受容への試論』 蒼丘書林 平成十四年五月）。

小川未明という人があったでしょ。わしはあの人だったよ  
うに思うが。「その人か、鈴木三重吉さんですかね」とにか  
くね。わしもその時分には知っていたんだけど、そこへ  
行って見てもらったということだ。見てもらったらね、ぼ  
ろくそに言われたということだ。わしはちよつと思ひ違  
いして他にあつたかもわからんが、何でも「内容に教訓的な  
ことがないというような批判をされた」と言つてね、怒つ  
てわしのところに来たですよ。「読んでみてくれ」と言つ  
てね。わしは読んだら、ひとつ何か「注文の多い料理店」  
かしら、あれは分かつた。他のやつは何が書いてあるか一  
向わからんのだ。「俺はこれはひとつも分かん」と言つ  
たらね、「そりゃ、おまえさんが分かんないのでは困る。  
こっちの言葉で書いてあるから、まだおまえさんは知つて

いるといつても十分には分かっていないから、俺が子どもを連れてきて読んで聞かすから、子どもが喜んだらどうだひとつ出版してみてくれないか」ということだ。それなら子ども呼んで来いということだね、それから子どもを一人ほど集めてきた。読んだ子どもは喜ぶんだ。わしは分かんのだ、そのひとつも。

こうした証言には、どうしても記憶間違いや、後年の印象から記憶が再編成されることもあつて危険なのだが、賢治童話が大人にとっては不可解でも、子どもには通用していたという内容は「広告ちらし」とも一致していることから、信用するに足る証言であるように思う。

賢治は農学校や羅須地人協会で、子どもたちに向つて自分の童話を読み聞かせたと言われており、例えば『新校本全集』の「年譜」の大正十五年夏の項に、伊藤忠一の談話として「自作の童話を子供らに聞かせ、子供らの批評を求めおつもりでいたらしい」とあるが、そうした結果から、自分の童話の性質を客観的に理解できるようになったのだろう。

しかし、賢治は早害地帯の子どもらに「花と侏儒とを語れども」、彼らは「刻めるごとく眉くらき」ままだつたというのである。

『注文の多い料理店』の「序文」では、イーハトヴなら現実の食べ物にも着物にもこだわらなくてよいのだと賢治は書いていたが、早害地帯の子どもたちには、何よりも現実的な食べ物や着物が必要だったということなのだろう。賢治は「純真

な心意の所有者」である子どもに対して、自分の童話が効果を持たない例に、おそらく初めて出会ったのであり、これは、それまで抱いていた自身の童話に対する思いが破綻したことを意味する。その驚きと衝撃が、この文語詩に書かれているのではないだろうか。

『注文の多い料理店』は大正十三年十二月に刊行され、「九  
九  
〔鉄道線路と国道が〕」の日付けは大正十三年五月十六日である。この頃には、まだ自分の童話が子どもたちに受け入れられない可能性など考えていなかったのだろう。

ただ「童話の扉に」というメモは、下書稿(二)に鉛筆で手入れをした際に書かれており、中地(前掲)によれば大正十三年五月よりだいぶあとで、『注文の多い料理店』の刊行よりもさらに後だろうという。また、木村東吉(「凡例」『宮沢賢治《春と修羅 第二集》研究 その動態の解明 第二分冊』淡水社 平成十二年二月)のように、下書稿(二)の手入れは「昭和八年六月までに成立したと推定される」とする論者もいることから、時期については明確にできない。

しかし、文語詩の内容を信じれば、早害の経験の後、大正末年から昭和初年頃、賢治は自らの童話の方向について考えざるを得ない事態にたいたつたということになる。

賢治は当初、童話集を「十二巻のシリーズ」で刊行する構想があつたとされるが、この構想は童話集の売れ行きが悪さや発行者である近森善一らの事情によつて破棄されたのと思われるが、もしかしたら自らの童話観の変化という賢治自身の内的な事情も作用していたのかもしれない。

昭和三年の春から夏頃に書かれたとされる「春と修羅 第二集」の「序」にも、賢治は「みんながもつてゐる着物の枚数や／毎食とれる蛋白質の量などを多少夥刺に計算したかの嫌ひがあります」と書いていたが、ここにも通底するものがあったのかもしれない。

また、この頃から、賢治の書く童話は、心象スケッチ的に溢れ出てくるイメージをどんだん書き綴っていくタイプから、現実的でしたっかりした作風のものが増えてるように思われる。羅須地人協会をはじめとする農村での活動などが複雑に影響していると思われるが、そのきっかけの一つとして、早害地帯における子どもたちの反応が関係していたとも考えられよう。

下書稿も定稿も現存せず、先行作品も関連作品さえも指摘されていない本作一篇だけから、よくも話を膨らませたものだと思われるかもしれない。しかし、平澤信一（「>資料紹介<山陰の詩人・岡崎泰固の宮沢賢治論について」「森」第一輯（昭和九年十二月）掲載分など）「論攷宮沢賢治4」中国宮沢賢治研究会 平成十三年十月）が紹介した岡崎泰固の「宮沢賢治論」には、賢治作品として「岩手山」と「早害地帯」の二篇のみが引用されていたということも重要だと思う。平澤も指摘するように「早害地帯」が初めて公にされたのはこの地方詩誌のようだが、いったい岡崎は、どこでこの作品を目にし、句読点まできちんと再現することができたのだろうか。岡崎泰固は盛岡医専で学び、岩手詩壇で活躍し、昭和十

年三月まで岩手に住んでいたというが、それまで未発表だった詩篇を引用していることから、賢治が直接、あるいは詩友を通じて間接的に「早害地帯」を見せたということになる。賢治没後に弟・清六が見せたのかもしれないが、賢治は昭和七年六月と推定される宛先不明の書簡下書きに、「一百篇」所収の「老農」を全編にわたって引用している例があることから、賢治がこの作品を、自身にとつて重要な意味のある作品だとして、岡崎のような岩手在住の詩人に書簡で送った可能性も十分に考えられてよい。

いずれにせよ、大正末年における早害の経験は、農業技術者・宮沢賢治に大きな影響を与えたのみでなく、童話作家・宮沢賢治にも少なからぬ影響を与えた可能性があることは、たとえ本作一篇があるだけであつても考えておいてよいことのように思うのである。

（本稿は「宮沢賢治「文語詩稿 一百篇」評釈四」（「甲南国文61」甲南女子大学国文学会 平成二十六年三月）の一部として既発表の内容を元に、平成二十六年四月の宮沢賢治研究会での質疑および懇親会における対話などを参考に改稿したものである。ご意見を頂いた方に対して、誌上を借りて御礼申し上げます。）